

論文要旨

論文題目：「在日」の言語意識と言語生活ーポストコロニアル・マイノリティの観点からー

著者：朴浩烈

学籍番号：LD071010

論文提出年月日：2010年2月

1. 研究対象とテーマの捉え方

マイノリティにおける研究対象としては、ネイティブ・アメリカンやチベット族などの先住・少数民族、ウクライナ系やポーランド系など北米におけるさまざまな移民集団、そして日本においては日系ブラジル人や在日フィリピン人、在日クルド人など、出自民族名や国別出自を前提にした呼称によって捉えることなどが一般的傾向であろう。

しかし、たとえば出自国を前提にしたとき在日コリアン・オールドカマーは、韓国なのか朝鮮なのかという「枠」で捉えきれない複雑さがある。それは渡日した当初には朝鮮半島に今日のような国家が成立していなかったからである。

戦前・戦後にわたる歴史的経緯・経験を経る過程において、もちろん共通項もあるが、他の少数民族や外国人たちとは違いもあるのが在日コリアンである。

この違いを生み出したのが時空間としてのポストコロニアル状況であるとの視点から、在日コリアン・オールドカマー（朝鮮学校周辺コミュニティ）を「ポストコロニアル・マイノリティ」として新たに捉えることによって、さまざまな特徴や現状を克明に描き出せるのではないかと考えた。またその特徴や現状はポストコロニアリズムから眺めるときにこそ、その背景や要因までも明らかに出来るとの仮説を立ててみた。

これまでポストコロニアリズムが重視し考察を行ってきた研究領域は歴史、文学、証言の3つの領域であったが、本論文は、ポストコロニアリズムに対する研究テーマとして、言語意識と言語生活を正面から扱った。

2. 研究方法

人間の心やアイデンティティ、言語意識や言語生活、ことばの動的実体や言語能力は目で見て確かめる、あるいは手に取って確認することが出来ないものである。

したがって調査、聴き取り、観察、比較を基本としたデータに基づく客観性から分析を行うことが求められよう。実証が重要キーワードになると考えられる。

本稿は、こうした問題意識を前提としながらも、さまざまな関連研究論文と学術書、日本や韓国、中国（朝鮮族）の資料（新聞・雑誌など）、被調査者コミュニティにおける資料も幅広く取り上げた。そして学術調査（アンケート）とフィールドワーク（聴き取り）を

行った。

研究は社会言語学をメインとしながら、文化人類学、歴史学、法哲学（法解釈、法価値論）、ナショナリズム論、心理分析（アイデンティティなど）など、多彩な学問領域を横断しながら行ったことになる。つまり学際的研究（複数の学問体系による新たな「知」の創出）によるポストコロニアル・マイノリティ論となるが、考究は言語意識と言語生活である。

3. 論文の構成

論文はA4版、195頁によって構成されている（その内、参考文献8頁）。

文字の大きさは本文10.5、注釈8、参考文献9ポイント。

本文には176の注釈、92個の「図・表」が挿入されている。

論文構成（目次）をまとめると以下のようなになる。

序章 ポストコロニアル・マイノリティという視座

1. ポストコロニアリズムと在日
2. 「言語」と「アイデンティティ」という新たな研究領域
3. 「マイノリティ」、そして「少数言語」から
4. 対象と研究アプローチ

第1章 朝鮮語話者とバイリンガル考

- 第1節 朝鮮語話数について
- 第2節 アイデンティティ分類からの話者考察
- 第3節 バイリンガルをめぐる議論
- 第4節 個人的バイリンガルと社会的バイリンガル

第2章 言語意識の構造と表出

- 第1節 言語意識の捉え方
- 第2節 方法論としての言語意識の「構造と表出」
- 第3節 言語意識の構造
- 第4節 表出としての言語意識
 1. 言語評価
 2. 表現された言語意識

第3章 社会言語学的考察

- 第1節 社会言語学のアプローチ

第2節 日常使用と非日常使用のことば

第3節 文法認識と言語評価

第4節 在日朝鮮語の捉え方

第4章 アンケートと聴き取り調査の結果と分析

第1節 アンケートと聞き取り調査の対象と概要

1. アンケート調査の企画
2. 実施したアンケートの内容
3. 実施期間と被調査者、調査方法について
4. 世代構成分析による朝鮮学校周辺コミュニティの特徴推論
5. 民族教育年数
6. アンケートの結果公表と分析の手順

第2節 バイリンガリズム

1. バイリンガル能力に関するアンケート結果と分析
2. 言語能力考察
3. 「第1言語（母語）」概念再考
4. 小括

第3節 生活と文化

1. 「ことばと生活感情」にまつわるアンケート結果と分析
2. 「文化と生活感情」にまつわるアンケート結果と分析
3. 小括

第4節 在日と民族性

1. 「図・表」化を通してみる調査結果
2. 「ことば、歴史認識、学校」について
3. 「名前、血筋」について
4. 「食生活、国籍」について
5. 「冠婚葬祭・民族衣装」について
6. 小括

終章 共時態及び通時態から考察する在日アイデンティティ論

1. イントロダクション
2. 共時態からの可能性としての「文化創造型在日アイデンティティ」
3. 通時態からの問いかけとしての「在日クレオール文化志向アイデンティティ」
4. 結論：新たな始まりとしての在日アイデンティティへの模索

あとがき

「図・表」一覧

初出一覧

参考文献（日本語文献・日本語以外の文献）

4. 論文概要

各章の概要は以下のようになる。

「序章」においては、題目への理解と研究方向を明示している。それ自体は問題提起に対する論述でもある。したがって「4. 対象と研究アプローチ」を除外すれば、本論文内容の一部としての性格も帯びているといえよう。

第1章では、在日による朝鮮語話者はどうなっているのか、その話者を既存のアイデンティティ分類からどのように考察できるのかを論じた。

そして、朝鮮語話者をバイリンガル論から分析することによって、社会的バイリンガルという視野が広がってくるという考察から、被調査者コミュニティに対する新たな見方、つまり社会的バイリンガル・コミュニティという視線へと誘った。

第2章では、言語意識を「構造と表出」によって観察・分析する新たな方法論を論じ、その方法論によって、在日の言語意識について事例を交えながら考察を行った。

第3章では、在日によることば（朝鮮語）を社会言語学的手法により分析をすすめ、実態が曖昧な「在日朝鮮語」とはいかなるものであるかを論じた。

第4章は、2006年11月から、2008年12月まで行ったアンケート及び聴き取り調査の結果公表（図・表）と分析によって構成されている。

まずは、学術調査（アンケート）とフィールド調査（聞き取り）がどのように行われたのかを記し、質問ごとに結果（統計）を図・表化し、分析を行った。

アンケートと聴き取りは、バイリンガル能力（一般成人15項目、中学高校生9項目）と、生活と文化（ことば含有：一般成人14項目、中学高校生14項目）に関する調査・分析である。これらを通して、今まで明るみに出なかった新たな事実（実態）も数多く言及されている。そして被調査者における錯綜するアイデンティティも抽出されている。

アンケートは以下のような質問にて構成されている。

一般成人用アンケート

A：バイリンガル能力に関するアンケート（15項目）

朝鮮語と日本語どちらが自信あるか、簡単であるか（○をつける。どちらかはっきり言えないという場合は、両方に○をつける）。

⊙ 日常会話

（朝・日）

- ㊟ スピーチ、会議などフォーマルな場面で話す (朝・日)
- ㊠ あいさつ (冠婚葬祭含む) (朝・日)
- ④ 自分の考えを正確に、繊細に伝えることが出来ることば (朝・日)
- ⑤ 日常会話のリスニング (朝・日)
- ⑥ 映画・テレビドラマのリスニング (朝・日)
- ⑦ 新聞を読む (朝・日)
- ⑧ 現代小説を読む (朝・日)
- ⑨ 作文・日記・手紙を書く (朝・日)
- ⑩ 簡単なメモをとる (朝・日)
- ⑪ 朝鮮語の表記と漢字の表記、間違いが少ないのは (朝・日)
- ⑫ 翻訳の場合 (朝鮮語→日本語、日本語→朝鮮語)
- ⑬ 知っている単語が多いのは (朝・日)
- ⑭ 文法知識は (朝・日)
- ⑮ 総合的言語能力は (朝・日)

B：生活と文化に関するアンケート（14項目）

質問⑭以外は、括弧（ ）の中から1つだけを選択する

- ㊟ 親戚は朝鮮語を知っている人が (多い、少ない)
- ㊟ 父母は朝鮮語を (わかる、わからない)
- ㊠ 家 (家庭) での朝鮮語使用は (80%以上、50%程度、20%以下、ほとんど0)
その理由 ()
- ④ 朝鮮語を使う場面・場所は ()
- ⑤ 自分の朝鮮語に自信が (ある、ふつう、ない)
- ⑥ 朝鮮半島 (南北) において自分の朝鮮語は (十分通じる、半分くらい、20%以下)
- ⑦ 在日には (北、南、両方) のことばが必要である
その理由：()
- ⑧ 在日同胞式の朝鮮語と言われることばは (だめである、直さなければなら
ない、問題ない)
その理由：()
- ⑨ もっと一生懸命勉強すればよかったと考えるのは (朝鮮語、英語、日本語)
- ⑩ 祭祀 (チェサ) を (おこなっている、おこなっていない)
- ⑪ 冠婚葬祭は (民族式、日本式、宗教を含めたその他) を希望する
- ⑫ 日常的に朝鮮の食べ物 (おかずなど) を (食す、食さない)
- ⑬ 自分と家族親族の結婚相手は (在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもい
い、その他でもいい)

その理由：()

- ⑭ 在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の3つであると思われる。3つに○をつけてください。

その理由：()

中学・高校生用アンケート

A：バイリンガル能力に関するアンケート（9項目）

朝鮮語と日本語どちらが自信あるか、簡単であるか（○をつける。どちらかはっきり言えないという場合、両方に○をつける）。

- | | |
|----------------------------|-------|
| ① 日常会話 | (朝・日) |
| ② フォーマルな場面で話す | (朝・日) |
| ③ 日常会話のリスニング | (朝・日) |
| ④ 映画・ドラマのリスニング | (朝・日) |
| ⑤ 作文は | (朝・日) |
| ⑥ メモは | (朝・日) |
| ⑦ 読書は | (朝・日) |
| ⑧ 朝鮮語の表記（綴り）と漢字の表記、自信があるのは | (朝・日) |
| ⑨ 総合的に | (朝・日) |

B：生活と文化に関するアンケート（14項目）

括弧（ ）の中から1つだけを選択する

- ㊦ 親戚は朝鮮語を知っている人が（多い、少ない）
- ㊧ 父母は朝鮮語を（わかる、わからない）
- ㊨ 家（家庭）での朝鮮語は（80%以上、50%程度、20%以下、ほとんど0）
- ④ 学校以外で朝鮮語を使う場面・場所は（ ）
- ⑤ 自分の朝鮮語に自信が（ある、ない）
- ⑥ 朝鮮半島（北南）において自分の朝鮮語は（十分通じる、半分程度、20%以下）
- ⑦ 在日には（北、南、両方）のことばが必要である
その理由：()
- ⑧ もっと一生懸命勉強しなければならないのは（英語、日本語、朝鮮語）
その理由：()
- ⑨ 祭祀（チェサ）を（おこなっている、おこなっていない）
- ⑩ 結婚相手は（在日がいい、韓国人でもいい、日本人でもいい）

その理由：()

- ① 30年後、日本に住んでいる自分にとって朝鮮語は（必要、不必要）
- ② 在日朝鮮人は朝鮮語を（知るべき、知るべきだとはいえない）
- ③ 韓国ドラマは（朝鮮語、日本語）で見ている
- ④ 朝鮮語の本を（読む、読まない）

「A：バイリンガル能力に関するアンケート」は、自分でより能力があると判断する優先言語を選択してもらうアンケートである。

アンケートは総数902人、聞き取り調査は83人から協力を得ることが出来た。

その結果、バイリンガル言語能力、言語意識、言語使用実態、混成文化、生活感情、志向性、民族性などにおける貴重なデータを、共時的一次資料としてまとめることが出来たことは、本論文のオリジナリティを支える特色のひとつであると考えられる。

また研究結果として、被調査者コミュニティにおけるアイデンティティを次のように捉えてみた。

「分裂アイデンティティ」と「自己回復型アイデンティティ」の葛藤における「自己尊厳および実存アイデンティティ」。

「分裂アイデンティティ」とは、朝鮮半島分断による引き裂かれたアイデンティティであり、朝鮮半島と日本という空間的距離における不安定アイデンティティ。

「自己回復型アイデンティティ」とは、コロニアルからの連続性を踏まえながらも、自己ルーツに対する確認と複合アイデンティティを求めようとするアイデンティティ。

これらが複雑に絡み合いながらも、マイノリティである「自分」という存在を見失うことなく、しっかり地に足をつけて歩いていこうとする「自己尊厳および実存アイデンティティ」。

終章は結論部分である。

序章から第4章までを、アイデンティティをキーワードにまとめてみた。そして今後、展開が予想される日本における多文化共生・多言語社会を念頭に、ポストコロニアル、多様化、グローバル化などを下敷きにしなが、日本に住む在日コリアンに焦点をあてながらも、さまざまなマイノリティをも念頭に置いた提言としての性格も兼ね備えている。

以上、論文構成の要点をまとめてみたが、研究の到達度としては、ポストコロニアル・マイノリティ（在日）の「言語意識」と「言語生活」を、ミクロ及びマクロ的視野から考察し、俯瞰できればと考えている。そしてその観察・俯瞰を、今まで行われてこなかった実証的な観点、そして共時的視点から言語化することである。

5. 今後の展望と課題

日本には現在、200万人以上の外国人が生活している。

しかし1945年にはすでに約230万人の在日コリアンが日本に住んでいたということ、その子孫が現在も日本にて特別永住資格をもって暮らしているという歴史的経緯と境遇は、他の在日外国人との共通点もあれば違いもある。そのようなことを「ポストコロニアル・マイノリティ」として捉え考察したのが本稿である。

しかし「ポストコロニアル」な状況を決して「諦念」や「悲観」として捉える必要はまったくなく、むしろ「先駆」や「成功例」として考える必要があると筆者は思っている。

それは縮小されてはいるものの、民族教育と在日におけるさまざまなコミュニティが60年以上にわたり存続し続けており、言語とアイデンティティも継承語、マイノリティ・アイデンティティとして、日本という地において立派に「実存」しているからである。

国際的に高く評価されているカナダにおけるイマージョン教育と比べても朝鮮学校教育はまったく見劣りしないばかりか、それらを凌駕する世界的な成功例だといえよう。

これこそ、東アジアにおけるポストコロニアル状況が生み出した現実・奇跡でもあろう。

本稿で扱った現状（共時態）としての「言語」と「アイデンティティ」を産出し、生命力を維持している要因はもちろん、在日自身による努力と歩みでもあり出自民族の支援や影響でもある。

しかし見逃してはならないのは、お互いの違いを認め共生・普遍的人権を尊重し、戦後から今日まで在日コリアンの生活と朝鮮学校をはじめとする諸権利擁護のため尽力した、全国各地・数多の良心的日本人（各種運動・市民団体等含む）の存在であろう。

本研究にて明示した、被調査者たちにおける言語とアイデンティティの様相も、その人たちのたたかいと連動していると言えよう。

日本におけるポストコロニアル研究としての在日研究は、単なる在日研究にとどまらない。時間と空間という次元において、間違いなく日本研究でもあり、北東アジア研究でもあるということ、そのような視線によって縦横に新たな視点や論点が展開されうる可能性が開けてくるものと考えられる。

ポストコロニアル・マイノリティとしての研究は多岐にわたると考えられるが、呼称問題、言語権、言語学及び文学考察などは今後の課題としたい。また中国朝鮮族や在米コリアンなど、他のマイノリティ研究および比較考察などにも取り組む必要性を感じている。

現在、日本において在日外国人との共存・共生、その実現のための施策が求められているが、ポストコロニアル・マイノリティ研究も、それらとの関連において考察するとき、新たな「知」の創出と「実践」にもなりえよう。